

# CHUOH TRY+ANGLE

知っ得通信

2016年06月20日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒730-0013 広島市中区八丁堀15-6 <http://www.chuoh-kyouiku.co.jp/>



中土井鉄信の「地域一番の繁盛塾になるための最強法則」 vol.52

## <コミュニケーションの本質とは!>

5月はG7があり、アメリカ大統領のオバマさんが、アメリカの現役大統領として初めて広島を訪問し、演説しました。この演説について、私は、いろいろなところで書いてきたのですが、どうも納得ができずにいます。一国のリーダーが過去の戦争を客観的に語るだけでは、戦争はなくなりません。ましてやオバマさんはノーベル平和賞を取っている政治家です。その自負をもって、広島演説をして欲しかった！そう思います。「過ちは繰り返しませんから」と主体的に言って欲しかった。しかし、そうではなかった。それが残念でした。

さて、今回は、「コミュニケーションの本質」について書きたいと思います。コミュニケーションは、日常的に溢れていますが、その実、本質的なことは案外知られていないものです。情報を伝達する手段としてのコミュニケーションは、二次的なものです。

ではその本質は何か——。そのことについて今回は書きたいと思います。

私は、コミュニケーションの本質を「他人の価値観の理解」だと考えています。他人の価値観を理解するために、コミュニケーションの場面で重要なのが、「受容」と「解放」です。

「受容」とは、他人の存在を受け入れることですから、まずは他人の気持ちを聴き、その気持ちをしっかりと受け止めることです。しかし、そうはいつでも、なかなか素直に他人が自分の気持ちを自己開示してくれるものではありません。そこで出てくるのが「解放」ということです。

他人の気持ちを聞く前に、相手の心を「解放」しなければ、他人は自分の気持ちを話してはくれないものです。では、どうするか——。

まずは、自分から他人に向けて自分の気持ちを「解放」するのです。自分の話をして、自分の素性を明かすことです。ここからコミュニケーションが始まります。

例えば、「先生は、こんな失敗をしてきたよ。でもこの失敗のおかげでこんな良いことがあったんだよ。だから、先生は、君たちにいっぱい失敗して欲しいんだ。失敗は、大切な経験だからな」というように、自分をまな板に乗せて、まずは目の前の他人に自分を「解放」するのです。それが、他人に自分を「受容」してもらうことです。

そして、それができたら、次に他人に対しての「受容」がスタートします。

この時に意識してほしいのが、傾聴ということ。他人

とコミュニケーションを取ろうとするのですから、自分の意識や関心が他人の意識や関心に向かわなくてはなりません。自分の関心で相手の話を聞くのか、相手の関心で相手の話を聴くのか、ここが大きな問題なのです。他人の価値観の理解を目的としたコミュニケーションでは、自分の判断や評価を置いておいて、他人の関心が話のどこに向かっているのか、そのことを考えながら話を聴いてください。大切なのは相手の話を相手の関心で聴くようにすることです。そういう聴き方ができれば、相手は自分を「解放」してくれるはず。必ず。

ここまで来ると、「受容」と「解放」がコミュニケーション場面でなされますから、相手に対して、自分が関心があることが伝わり、相手に対する存在承認が与えられることとなります。そうなれば、信頼関係が芽生えて、さらに「受容」と「解放」が行われやすくなります。そうして、コミュニケーション機会が増えれば増えるほど、信頼関係が深まっていくことになるのです。生徒や保護者とコミュニケーション機会を多く持った方が良いのは、そのためです。

それでは、ここで教室の中のコミュニケーションを見直してみよう。

先生と生徒のコミュニケーションが伝達だけで終わっているのか、それともお互いの「受容」と「解放」が行われているのか、どちらが多いでしょうか。

言い換えれば、生徒の価値観を理解しようとコミュニケーションが行われているのか、そうではないかということです。ここを見直してください。意識的にコミュニケーションを生徒や保護者と取っていかなければ、私たちはお互いを理解することができないのです。話すことがコミュニケーションではありません。コミュニケーションをとることで「受容」と「解放」がなされ、結果的に生徒や保護者の価値観を理解できることがコミュニケーションなのです。

ぜひ、意識的に、生徒や保護者とコミュニケーションをとってください。退学が減り、入塾が増えるはず。必ず。

### 【編集後記】

中土井鉄信が理事長を勤めるNPO法人ピースコミュニケーション研究所主催のセミナー『教師サポートセミナー』が今夏8月6日(土)に開催されます！今、注目の『アクティブラーニング』について中土井と浅井がお話しさせていただきます。対象は、学校の先生方、及び教育委員会などの学校管理・支援機関の方々、これから教師を目指す社会人・学生の方々です。なんと受講料は無料！ご興味のある方は是非、ご参加ください。詳細は下記HPにて近日発表いたします。

<http://www2.tbb.t-com.ne.jp/peacecomken/>

## 数字でみる学習塾経営・業界のトレンド Vol.16

### 「あなたが普段、最もよく利用する

#### コミュニケーションアプリは次のうちどれですか？」

近畿大学が医学部と農学部を除くこの春の新入生のうち7,355人に行った、こんなアンケート調査の結果が5月末、同大から発表されました。

何だと思います？

結果はLINEの圧勝！

回答を多い順に挙げておきましょう。

【順位】	【コミュニケーションアプリ】	【%】
1位	LINE	75.4%
2位	Twitter	17.6%
3位	無回答	2.0%
4位	利用していない	1.5%
5位	その他	0.9%
6位	instagram	0.8%
7位	Google	0.7%
8位	Skype	0.6%
9位	Facebook	0.4%
10位	vine	0.1%

新入生の75.4%、実に4人に3人以上がLINEを最もよく利用していました。

対してTwitterは17.6%、instagramは0.8%、Facebookは0.4%ですから、LINEの圧倒的な一人勝ちです。

が、このアンケートで注意したいのは、質問が10個の選択肢の中から「最もよく利用するアプリ」を尋ねている点です。

つまりは、このアンケートから読み取れるのは、「最もよく使っている」のがLINEであり、2番目がTwitter、3番目がinstagramだということであって、彼らが必ずしもLINE以外、あるいはTwitter以外を使っていないということではありません。

ということは、もとより推測ではありますが、彼らはおそらく複数のアプリ——最低限、LINEとTwitterの2つ——を用途に応じて、上手に使いこなしているのでしょう。

同大のプレスリリースも、それを「踏まえると、今回のアンケート結果は以下の3点に要約される」と述べています。

- LINEは日常的な連絡を仲間に発信する時に利用
- Twitterは情報の収集や、情報を広めたい時に利用
- LINEもTwitterも両方利用するが、内容により使い分けている

さて、ご存じのように近畿大学は、どこの模試でも偏差値が50台半ば、大学受験者数ランキングでも毎年1位、2位を争う人気校です。

その大学の新生、要するに先日まで最もボリュームゾーンに位置していた受験生たちからこうしたデータが得られたわけですから、われわれもそれを利用しない手はないでしょう。

では、どう利用したらよしいのか。

- ① まずはLINEを塾と塾生相互間の情報ツールとして活用すること
- ② 次に、Twitterを情報発信ツールとして活用すること
- ③ Twitterの情報発信力が弱いと感じたら、LINEの情報発信版のLINE@に切り替えてみることに

をお勧めしたいと思います。

正直に白状しますと、わたしは文字通りのデジタルオンチでして、LINEを使ったことがありません。

TwitterとFacebookのIDは持っていますが、開くのはせいぜい月に2回で、しかも書き込みはほとんどせずただ読むだけ。そうしたわたしが申し上げるのもオコガマシイのは承知しています。

とはいえ、さほど費用はかかりません(無料でもイける)し、リスクもほとんどありません。

同じくデジタルオンチの同胞諸氏には、是非ともトライしてみて下さいとお勧めしておきたいと思います。

蛇足ですが、同大のアンケート調査からもう一つ、新生が所有しているスマホの機種を紹介しておきましょう。

【順位】	【スマホの機種】	【%】
1位	iPhone	73.1%
2位	Xperia	10.8%
3位	その他	3.9%
4位	AQUOS	3.7%
5位	GALAXY	2.4%
5位	無回答	2.4%
7位	ARROWS	1.9%
8位	機種不明	1.2%
9位	Nexus	0.5%
10位	MEDIAS	0.1%

ハードのトップはアメリカ製、ソフトのトップは韓国製…。寂しいですねえ。



今回は直接公立中高一貫校に関係したことはありません。公立高校の最近の動きについて見ていきたいと思います。皆さんは、東京都立日比谷高校をご存知でしょうか。年配の方ならば、学校別東大合格者数でかつてトップの座にあった公立の名門校という認識をお持ちでしょう。今から50年以上前の1960年代前半は、大学合格実績において、公立高校は圧倒的に強く、東大入試でも東京都立高校の全盛時代でした。学校別で見ますと、都立日比谷がトップの座に君臨し、後に続く都立西、戸山、新宿を含めた4校は「都立四天王」などと称されていました。1960年の学校別東大合格者数ランキングでは、7位まで都立高校が独占し、そのほかトップ20の中には神奈川県立湘南、埼玉県立浦和などの県立高校、東京教育大附属、同附属駒場（現筑波大附属、同附属駒場）の国立校が並び、私立高校の姿は麻布、灘、開成の3校だけというものでした（麻布8位の後、灘、開成が9、10位と続く）。

都立高校の全盛時代は、1967年に東京都立高校に導入された学校群制度とともに見事に崩壊しました（この制度の特徴は複数の学校が入った一つの群を受験生が目指し、合格しても群のどの学校に割り振られるかわからないというもので、1981年まで継続）。日比谷の群のパートナーとなった学校は、都立西などが入った群の学校と比べて合格実績において魅力的ではなかったこともあって、有力都立高の中でも日比谷はあっという間に凋落したのです。学校群導入後の最初の卒業生の受験時1970年には、日比谷からの東大合格者数は99名と百名を割り、10年後の1980年には9名と一時1けたになってしまいました。さらに10年後の1990年から2004年までの15年間は1けたの合格者が続いたのです。

この学校別合格者ランキングに、今変化が生じているのです。1970年代以降凋落して久しい都立の名門日比谷が「復活」してきたのです。同校の今春の東大合格者数は前年を16名上回る53名となり、公立校では全国トップで、ベスト10入りはなりませんでしたが、全国11位までに回復してきたのです。その背景にあるのは、2001年に同校が「進学指導重点校」に指定されたことです。同校は指定されて15年の間にじわりじわりと合格実績を伸ばし、2010年以降は「37名→29名→30名→29名→37名→37名」と比較的安定した推移を見せ、今春入試では53名とベスト10まであと一息のところまで来たというわけです。

都立日比谷に代表されるように、今公立高校の「巻き返し」が目につきます。元々府立高校が強かった大阪府でも近年は私立一貫校の伸長が目についていたわけですが、2011年に府立高校10校を『進学指導特色校』とし、それらの10校には国内の難関大学進学を目指す文理学科を設置しました。そして、今春より府立北野、天王寺両校は全クラスが文理学科となりました。私立で言えば、全クラスが特進コースとなったようなものです。京都府では、2014年に入試制度を変更し、京都市の南北通学圏を一つに統合し、総合選抜を廃止して、単独選抜にしました。兵庫県では、2015年より学区が従来の16学区から5学区に改編されたことで、県立長田、神戸、加古川東、姫路西などの高校の評価が高まりつつあります。いずれも、中学受験の盛んな地域での公立高校の「巻き返し」と見ていいでしょう。

ただ、巻き返していると言われるそれらの公立高校に進学した場合の3年間は、期待される大学合格のために、時間的な制約もあって、学校行事やクラブ活動をはじめとする人間形成面の様々なことで犠牲を払わなくてはならないことが多々あると思います。地方の公立のトップ進学校の多くでは朝と放課後の補習はあたりまえとなっているということを知ったことがあります。今、盛んに言われる能動的・主体的な学びとは一線を画した世界がそこにはあるのではないのでしょうか。それだけ3年間での指導で超難関と言われる大学への「合格力」を培うということは大変だということも語ってくれているわけです。しかしながら、公立高校の巻き返しを公立中高一貫校の立場から見た場合、決して悪いことではありません。それだけ公立校の存在を自治体が後押ししてくれているということですから、間接的には公立中高一貫校への支援にもつながるからです。

公立中高一貫校は学校行事やクラブ活動を含めた人間形成面で充実していることはいわずもがなのことです。そして、公立中高一貫校には今後予想される新しい大学入試制度への対応力（思考力・判断力・表現力の育成、獲得した知識の活用力の錬磨など）もあるわけですから、そこに大学受験体制、大学合格力の整備が公立高校の巻き返しを通じて、ノウハウ・情報が共有されれば、順調に推移してきている公立中高一貫校の大学合格実績は間違いなく伸長していくことでしょう。それだけ中学段階での公立中高一貫の選択の意味が大きくなっていくということではないかと思うのです。